

年齢によるライフスタイル変容に着目した地域特性による類型の試み

日大生産工(院) ○松下 優太
日大生産工 山岸 輝樹

1. まえがき

住生活に関わるライフスタイルには個人の性格や意思などの内側からなる部分と地域や環境などの外部からなる部分がある。外部は居住地や住まいのように個人の嗜好によって選択される側面と、その地域環境のあり方によって生活・消費の選択が影響されるという側面がある。つまり居住地の違いは選択の結果として、または選択を限定するものとして居住者のライフスタイルと関係する。

また、ライフステージの変化によって日常的な生活行為も変化し、求められるライフスタイルが変容することも知られている。これらを合わせて考えれば、年齢の変化に伴うライフスタイルの変容にも地域性があると仮説できる。

そのような仮説論証を目指す研究の一環として、本稿ではその取り掛かりとしてライフスタイルとライフスタイル変容に関わる地域特性の把握のため、既往の文献1)～4)をもとにライフスタイルと地域環境の関係に関する論の整理を行うことを目的とする。

2. ライフスタイルの整理

本稿では既往の論の整理を行う。

地域とは広辞苑では区切られた土地とされているが、ライフスタイルでは主体となる個人が存在する。したがって本研究ではその人にとっての地域とは特に居住地を指すこととする。

文献1)において、重村力は生活空間とは物的空間構成、生活行為的空間秩序、心的空間構造の3つの相からなると述べている。また物的空間構成は住宅、道路、公園、産業用地や農地といった各要素が一定の秩序を持ち存在していると述べており、これは地域であると言える。生活行為的空間秩序は人が日常生活を営む行為そのものであり、心的空間構造とは主体となる人の性格や意思決定などの精神的なものである。これら3つの相が相互に影響しあい生活空間としてライフスタイルを形成しているとする。これを図1で示す。本研究ではライフスタイルをこの様な定義として取りつかう。

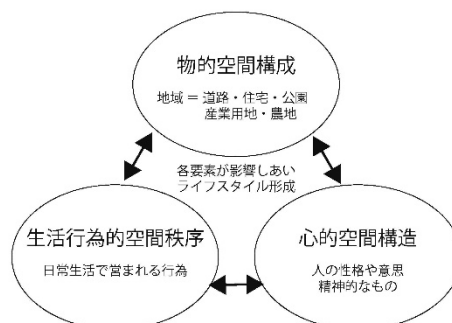


図1. ライフスタイルの形成

3. ライフスタイルと地域の関係

文献1)～4)に基づきライフスタイルと地域との関係を整理し、項目を検討する。

文献2)において、橘弘志は計画的集合団地と高密度既存市街地の高齢者の行動環境を比較した結果、地域での利用ルートと利用ポイント（施設）の選択性において量的かつ質的に違いが見られた。施設の量や立地、計画的か自然発生的かという地域環境の質の違いが人の行動にも反映されて違いが見られたということは物的空間構成である地域が生活行為的空間秩序と心的空間構造に影響を与えたと言える。

文献1)において、重村は生活とは家の社会性、機能依存度、近隣性、広域性の4つの要素から構成されるとして生活型を8つに類型化した。調査より生活と住宅の相関を捉えているが、そもそも地域にどのような施設がどのくらいあるかといった地域との相関の細かい論考は行われておらず、その型理解に包含されている。生活構成要素の中の地域と関連性があると思われる近隣性と広域性では項目として近隣施設の空間利用、近隣での買い物、近隣づきあい、通勤通学がある。重村はこれらの地域資源を行為として取り扱っていたが物的空間構成として数量や立地を見ていくことにより、生活行為の地域特性を捉えることの可能性を示唆している。

文献3)～4)において、住宅・都市整備公団（以下、住都公団）は多様化するライフスタイルに対して住宅設計を行うためユーザーズトックを用いてアンケート調査を行い10のラ

ライフスタイルシートを作成した。本調査は橘と重村が実際の地域を選定し調査したのに対して、地域選定はせず3つの相で言うならばユーザーの心的空間構造に重きを置いている。調査分析ではクラスターごとに山手や下町などの地域ブロック指向性や鉄道沿線に対する指向性、その選択理由が報告されている。物的空間との直接的関係を把握しようとする調査ではないが地域ブロックと沿線の選択理由で値の高い項目と地域指向性に関するキーワードはユーザーニーズと地域特性の関係を捉えるうえで参考になると考えられる。地域や沿線の指向性に関わる特徴的な項目として通勤、都心との距離、自然や緑の多さ、子供の教育、健康が挙げられる。

以上より、橘の研究から地域資源の数量や立地、計画住宅か否かといった物的空間構成が他の相に対して影響を与えていることが分かり、地域のあり方がライフスタイルに影響を与えているといえる。重村と住都公団の調査から地域特性に関係していると考えられる項目として近隣施設の空間利用、買い物、近隣づきあい、通勤通学、都心との距離、自然や緑、子供の教育、健康が挙げられた。今後の展開としてこれらの項目を物的空間構成として捉えるためにスーパーや病院、駅といったように各項目に関する場所を選定して地域内の数量や立地によって分析し地域特性が型として現れるか検証する必要がある。

表1. 各研究の地域性

橘	重村	住宅・都市整備公団	本研究
	汎用性と広域性の中での地域選定の活用 (生活行為的空間秩序)	地域選定していない ユーザーのイメージ調査 (心的空間構造)	地域がライフスタイルに影響していることを確認
施設の数量や立地 (物的空間構成)が 生活行為的秩序と 心的空間構造に、影響 ↓ ライフスタイルに影響	地域資源に関する 数量や立地の要素なし	地域資源に関する 数量や立地の要素なし	地域特性に、関係する項目を 重村と住都公団から挙げる

4. ライフスタイルと地域特性での問題

地域特性に関する項目を挙げてきたが、ライフスタイルにおいて地域特性によって問題が生じる場合がある。

ライフステージの変化によって生活に変化が起き、その人が望む生活像、つまりはライフスタイルが変容することがある。この変容が大きな変化として体感されるのは、ライフステージにおいて大きな変曲点となりうるときであり、具体的には高齢化による体の衰えが顕著になるときや、出産による子育てを行う時期などが挙げられる。

一つの地域においても様々なライフスタイルを許容しているものと考えられるが、そこには傾向があるものと考えられる。一般的にはライフステージの変化とともに多様性も移行していくと考えられる。しかしライフステージ上の大きな変化によって制限かかった時、多様性の中には変化に耐えきれない、もしくは変化後にそのまま移行できず選択できなくなる多様性が発生する。例えば、高齢化による身体機能の低下によって日常行動圏域が縮小したとする。このときに地域資源であるスーパーの数や立地といった要因で今まで通っていたスーパーに行けなくなる。この場合、生活のためには別の場所で買い物する必要がある、高齢化前と同じライフスタイルを継続することは困難になる。

このように地域特性によってライフスタイルが継続し続けられるかどうかといった問題は居住者の地域に対する住環境の満足度に影響し、さらには地域の継続性にも影響するといった居住者と地域双方の大きな問題となる。

5. まとめ

既往研究をからライフスタイルと地域が関係しあっていることを確認できた。さらに地域特性に関係していると考えられる項目を挙げ今後さらなる検証の必要がある。

またライフステージの変化に伴うライフスタイルと地域特性によって生じる問題は、ライフスタイルの継続性と地域特性の関係としてさらに研究する必要がある。

参考文献

- 1) 重村力, 定住の構造—その生活学的考察と計画論的展開— (1992)
- 2) 橘弘志・高橋鷹志, 地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究—大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー, 日本建築学会計画系論文集, No.496 (1997)
- 3) 住宅・都市整備公団 建築部, ライフスタイル対応住宅の検討設計その1 (1988)
- 4) 住宅・都市整備公団 建築部, ライフスタイル対応住宅の検討設計その2 (1989)